

# ホスピタリティアート・プロジェクト

## ー ワークショップ・展示 ～金沢市立病院における実践から～ ー その1

The Hospitality Art Project Workshop Report (1)  
ー Art Practice and Exhibition at Kanazawa Municipal Hospital ー

三 浦 賢 治  
MIURA Kenji

### 1.はじめに

医療環境における「ホスピタリティ(もてなし)」とは何か、その望ましいかたちがあるとすれば、アートはどのように機能することが可能なのか。幾度かのワークショップの経験を経てもその結論に至ってはおらず、未だ模索の中にいる。それは本稿を書いている筆者の、このプロジェクトに携わるまでの自身とアートとの関わりが、自分自身の制作、表現活動の視点に立っていたことに起因している。

筆者にとって、人がものをつくり、表現することによる「アートによる癒し」の効用についての認識は、創作者としての立場から自身に向けた行為としての一機能として存在している、という程度の、漠然としたものであったからである。しかしながら、一側面としての、医療環境におけるアートの潜在的な可能性を探る作業を通して、人の根源的な、ものをつくる行為によってもたらされる喜びや、感性が震える場面に立ち会ってきたこともまた事実である。

「ホスピタリティアート・プロジェクト」を通じたこれまでの実践から、医療環境においてアートが果たす役割と、それが芸術・美術機関に寄与する教育効果について、課題と指針を見出せることを期待しつつ考察していきたい。

### 金沢市立病院における実践

ホスピタリティアート・プロジェクトにおけるワークショップ・展示部門の担当となり、プロジェクト発足以来、主に金沢市立病院を活動の拠点とし

て企画を実施してきた。これまでに筆者が担当したワークショップ・展示は次の通りである。

- |        |   |
|--------|---|
| 平成21年度 | ・ 光の回廊シリーズ (その1)<br>《ロビーを彩る光のアート》<br>・ 《似顔絵をプレゼント。》<br>・ 《万華鏡ワークショップ》 |
| 平成22年度 | ・ 光の回廊シリーズ (その2)<br>《夢の水族館》<br>・ プロジェクト記録病院内展示                        |
| 平成23年度 | ・ 光の回廊シリーズ (その3)<br>《オアシス》  |

上記の企画について、「～光の回廊シリーズ～」はこれまでに3回行われ、金沢市立病院1階の待ち合いホール中庭に面した大ガラスを画面に見立て、カラーセロファンを主な材料としてステンドグラス風の装飾を施したものである。「似顔絵～」では、学生が入院患者と向きあい、似顔絵を描いてモデルとなった患者に渡した。「万華鏡～」では、万華鏡キットと図柄のもととなる材料を用意し、患者が好みの材料を組み合わせせてオリジナルの万華鏡を制作した。

金沢市立病院におけるワークショップ・展示の実践について、これまで活動記録として筆者の所感文と参加学生の感想文のかたちで記録してきた。本稿ではそれらの過不足のある部分について修正・加筆したものから抜粋し、そして平成23年度「オアシス」までの記録を振り返りながらプロジェクトの輪郭を探っていく。

## 2. 「ホスピタル・アート・プロジェクト」から「ホスピタリティアート・プロジェクト」へ

金沢美術工芸大学と金沢市立病院が連携して立ち上げられたこのプロジェクトは、当初「ホスピタル・アーツ・ムーブメント」を経て「ホスピタル・アート・プロジェクト」と称されていた呼称が、病院と美大スタッフがコンセプトを絞っていく中で「ホスピタリティアート・プロジェクト」と変更された。「ホスピタル (hospital)」の原義である「ホスピタリティ (hospitality: もてなし)」を「ケア」と読み替え、患者、医療者、そして美大スタッフが対等の立場で参加し、それぞれがアートの持つ潜在力を見出し、活用することをこのプロジェクトの目標とした。

ホスピタル・アートの概念は、主にヨーロッパにおいて医療分野におけるアートの潜在的な可能性について探る活動として存在しており、日本でも一部のアーティストや美術系大学による活動として行われていることは今回の関わりの中で知った。それらの活動は、医療施設に美的な、癒しの作品なり空間が提示され設置される場合が多くみられた。

医療環境におけるホスピタリティをケアと読み替えて考えることは、ワークショップを中心とした参加型の特長を持つプロジェクトとして、企画の内容を練っていく上で重要なポイントになった。プロジェクトのワークショップ・展示部門として、今年度は計3回の活動を行ったが、それぞれに特徴のある成果が見られた。以下に順を追って経過を述べる。

## 3. 記憶の片隅に

美大と市立病院の第1回合同会議は前年度にあたる平成21年3月12日に病院内2階会議室で行われた。その時の参加者はプロジェクト座長横川善正教授をはじめとする美大教員と、高田重男院長ほか医師と病院職員の20余名であった。会議の冒頭で横川教授から本プロジェクトの趣旨について説明があり、高田院長からは金沢市における医療の成り立ち、市立病院の歴史と医療施設環境の現状が説明された。

美大、病院出席者の紹介の後、美大からはあらかじめ病院側から案として提示されていたプロジェクトの各部門に沿って、担当教員がそれぞれの考えを述べた。

席上、企画展示担当として自分の考えも求められたが、「ホスピタル・アート (この段階での呼称)」についての認識が乏しく、会議用に準備した数枚の資料によるのみという状態だった。「患者」「ケア」といった言葉から微かにイメージできたことは、自分が学生時代に足の怪我で長期入院した際に、相部屋で隣のベッドにいた80歳半ばも過ぎた男性患者とのやりとりである。

身体の何処の調子が悪いのかも聞かなかったが、その「老人」は、たまに話しかけても聞こえているのかいないのか、自身の左右もよく分からず、身の回りのこともおぼつかない、といった風だった。

となりのベッドで退屈そうに寝転がっている若者が画学生であると知ったようで、ある日の午後、似顔絵を描いてくれと声をかけられた。暇にまかせてスケッチブックと鉛筆を手に取り、お互いに上体を起こしてベッドに腰掛け向き合う形で描き始めると、「彼」の表情と姿勢に変化が現れた。

自分の小用もままならない老人が、20分近くもこちらを見つめ、両膝に手をつかえ棒にして姿勢を崩さず耐えているのである。その人格を湛える眼差しからは、絵が出来るまで体勢を保つという意志が感じられ、似顔絵を頼まれたときに内心面倒な気持ちになったことまで見透かされているようで恥ずかしい思いがした。

描いた絵をスケッチブックから1枚外して渡した。彼はまた「描かれる前の老人」に戻り、たいした出来でもなかったその似顔絵を面会に来る家族や看護師に自慢していた。

プロジェクトの担当になって掘り起こした古い記憶である。

## 4. 「ワークショップ部ちきゅう」の学生たち

この段階で担当としては、プロジェクトを実施す

るための不可欠な条件として、ボランティア学生の能動的な参加を想定していた。そして参加する学生には、ワークショップの際に患者に対して敬意の姿勢をもって接することのできるメンタリティが必要であった。

スタッフ募集の掲示というような手段は取らず、学生サークル「ワークショップ部ちきゅう」のメンバー数人に直接参加を呼びかけた。プロジェクトの趣旨に賛同し、理解し得る学生をイメージしたとき、定期的に子ども達に図画工作のワークショップをしている彼らを中心としたスタッフを組めたなら、安全で速やかな立ち上げが期待できると考えた。

参加の声に集ってくれた学生は、「ちきゅう」を中心メンバーとする油画専攻学部3年生から4年生の11名である。スタッフを組織する際のイメージとして、油画専攻学生に限るつもりはなく、専攻をまたいで組織することが望ましいと考えていたが、結果として必要と思われる人数に至ったため、先ずはこのメンバーで始めることにした。6月30日の合同会議を受けて、具体的にどのような企画が考えられるか話し合った。筆者と同じく担当の青柳りさ教授からもフランス研修の際にパリ近郊で取材した病院内の壁画や装飾を紹介された。

8月19日には学生と共に病院施設と空間の視察を行い、その日の合同会議では学生も同席して高田院長の説明を受けた。現場を見た学生スタッフの反応は早く、会議終了直後、院内1階待合いロビーの椅子に座って意見を出し合った。

第1回企画にあたり、ホスピタリティアートという概念について馴染みの薄いと思われる金沢市民にむけて、また自分たちも含めて分かりやすい内容にした。

病院側から提案されていた場所の中から、病院を訪れて最も目に映る場所である、1階待合いロビーから中庭に面した大きな窓ガラスに絵を描く、貼るなどの何らかの装飾をする。そして自分達だけが作るのではなく、患者、来院者、病院関係者も参加するワークショップ形式にする。どのような材料で描くか、病院という場所に適したテーマは何かという

ことについては夏休み中に各自考え、後期開始後皆で話し合う、というところまで、15分程で決まった。

## 5. ワークショップ・展示 平成21年度

### ①光の回廊シリーズ（その1）

#### 《ロビーを彩る光のアート》

後期授業開始後しばらく学生スタッフからは反応がなく、内心どうしたものかと気にかけてが静観することにした。学生にとってこれが過剰な負担にならないために、またこのプロジェクトに参加することが自身の制作研究の糧になるように配慮する必要がある。学業と平行して程良いバランスで行える時期を見計らって話し合った結果、学生から一つの案として「生命の樹」をテーマとした、大窓にカラーセロファンを用いたステンドグラス風の装飾を施すことが提示された。

病院側にもその案を伝え、会場設置等の確認をした。図柄のイメージスケッチも用意され、実施日は10月25日(日)と26日(月)の2日間に決まった。10月15日(木)には病院内で、「地域医療とアート」と題して高田院長による基調講演が行われ、病院と美大とがホスピタリティアートについての認識を深める機会となった。

数日して学生から、カラーセロファンをガラスに貼る際の技術的な問題が解決したとの報告を受け、大学の窓ガラスで試作が行われた。早速実施日までの具体的な準備計画について話し合った。実施当日に最初の段階から始めるのは労力的にも時間的にも無理があるだろうということで、実施2日前に大学で本制作の下準備を行った。学生スタッフの多くがワークショップの進め方に慣れており、作業は手際よく進められた。セロファンを適当な大きさに切りそろえ、参加者のために厚紙で動物や植物を象った型紙を用意するなどし、諸用具の点検をしていくつかの段ボール箱にまとめた、と書くと簡単であるが、これだけでも午後から夜にかけての作業になった。(図1)

自分はというと、これまでプロジェクトと名の





図1

付く事柄に関わったことがなく、作業内容のどこまでが教員でどこからが学生の分なのか手探りの状態だった。初めは企画展示担当として、学生スタッフを確保した後は、制作費の管理や連絡などの段取りを済ませれば事は足りると思っていたが、実施日が迫るにつれセロファン、窓ガラス保護用シートなどの主な材料の注文の他に、会場の設営や作業の進め方の詳細を決める必要があった。

学生と話し合い作業効率を考えた結果、ワークショップ当日の進行は学生に任せたが、設営に関する現場窓ガラスの計測、脚立や作業台代わりの箱イスといった備品の調達からワークショップで使う諸用具の買い出し、果ては搬入出用トラックの手配、運転までが自分の仕事となった。また実施するにあたり、場の提供や病院内の周知等の連絡は横川由起子医師を窓口として進められた。

10月25日(日)第1日目。午前中に窓の保護用シートの貼り付けを終え、休憩の後セロファンによる制作が始まった。ワークショップを翌日にひかえ、休



図2

診日であるこの日のうちに絵の全体像を作る必要があった。ワークショップが始まると、参加する入院患者や来院者に追われ、スタッフが窓の制作に向かうことは難しいと予想されたためである。休日にも拘わらず、一部事務局職員と私服で現れた数名の看護師が作業に加わってくれた。作業は許される限り午後8時過ぎまで行われた。(図2)

10月26日(月)第2日目。午前中から大ガラスの前の2カ所に設置したワークショップ用のテーブルは、入院患者や来院者で賑わいを見せた。自分は複数の報道メディア関係への対応で予想外に忙しく、ワークショップそのものにはあまり加われなかったが、そこにはそれまでの病院の日常にはない空間が現出しているのが感じられた。(図3)



図3

話を聞きつけて少し遠慮気味に訪ねて来る人、病室からわざわざ服に着替えて来る人、普段と違う風景に興味深く見入る病院関係者。参加者はセロファンとスティック糊を手にも思案しながら、何かを作る喜びを感じているようであった。

学生の介添えで作業台に登り、自分でガラスにセロファンを貼り付けVサインで記念写真に興ずる老婦人、自分で切り取ったセロファンを学生に貼ってもらい満足げな表情を浮かべる車椅子の入院患者、制作には決して参加しないが作業の経過を何度も見に来る男性、手の空いた僅かな時間を利用して楽しそうに作業に加わる看護師。今日の院内の風景が、入院または通院する患者とその周囲の者にとって、いつもと違って見えたことは想像に難くない。

病院が行った患者・関係者へのアンケートに答え

た人が45名であることからすると、制作に参加した人以外にも、病院につくられたアトリエとギャラリーでのこうした交感の様子を見届けた人は相当数にはなるだろうか。最初の企画ということもあり、普段と違う賑わいに遭遇した患者や病院関係者の反応に注目した。

アンケートに答えた45名のうち、ワークショップ・展示の印象について良かったと答えた人が44名（回答なし1名）で、ワークショップに「参加した」または「参加しなかった」と答えた27名からは「入院生活に変化があって良い。」「待ち時間の楽しみとしてよい。」「病院が明るくなった。」といった、肯定的な意見が大多数を占めた。

一方、ワークショップに「参加したくない」、「回答なし」と答えた人は18名である。企画は「良い」としながらもワークショップに参加せず、「しんどい。」「年寄りだから」「遠慮する。」という回答が少なからずあった結果からは、慣れない出来事に対する消極性や企画から距離を置いていた様子がみとれる。しかしながら患者の体調や気分の状態、関係者には時間の制約等の都合があるであろうし、人それぞれのプロジェクトとの関わり方があっていい。

ワークショップ実施にあたり学生との話し合いでは、作品が公に晒されるかぎり美大生が作る作品としてのレベルというこだわりもあった（学生はこれを冗談まじりに「美大クオリティ」と呼んでいた）。「患者と学生との協働によるコミュニケーション」のコンセプトを理解しながらも、その成果が見られることを自然と意識し、ワークショップ会場では、ガラス窓の作業にかかりきりになる者と、患者の制作の補助にあたる者とに分担して進められていった。

参加した患者や来院者から期せずして、「病院でこんなに楽しい思いするとは思わなかった」「痛いのが忘れたわ」という声を聞いた時、その場にいた自分を含め、学生スタッフもこのプロジェクトの本質に気付いたように思う。

作業台で向きあう患者と学生スタッフの周りには、スタンドガラスの仕上がり具合を意に介さず「一緒につくる」楽しさと一体感が感じられた。

今回、筆者の印象に残った光景がある。華やぐワークショップ会場の横で、1歳に満たないと思われる赤ちゃんが、その小さな身体のどこかに（痛々しくてよく見る事が出来なかった）点滴をしたまま看護師に抱かれ連れられてきていた。その赤ちゃんは、色とりどりのセロハンで象られた動物や果物で埋められていく窓を見て喜んでた。母親らしき女性はわが子とは少し距離を置き、ワークショップに参加することもなく待合ロビーの椅子に浅く腰掛け、少し疲れた表情でぼんやりと作業の様子を眺めていた。

外が暗くなりかけた頃、縦3m横10mの大窓に秋の実り豊かな「生命の樹」が創出した。当初2週間程度の展示予定だったが、来院者や病院関係者からの好評との報告を受け、1ヶ月以上の展示となった。（図4）



図4

「ロビーを彩る光のアート」は、一時ではあるが病院の日常に変化をもたらし、患者の気持ちにささやかな「彩り」と「光」をもたらしたのかもしれない。自分にとっても初めて関わったこのプロジェクトは、普段見る機会がなかった、患者に対して丁寧な対応をする学生の姿とともに、人が何かを創ることの意味を考え直す新鮮な経験となった。

2日目の食事休憩の際、病院から学生達に病院食が用意された。これも経験の一つとしてという病院長の教育的配慮だったと思うが、控え室で学生達は普段の食事同様に美味しい、美味しいと喜んで食べて作業に戻っていった。職員が食器を戻しに行く

と、調理師がきれいに平らげた食器を見て感心しきりだったという。

今回の企画を概ね成功に終えることが出来た要因の一つとして、このような、目の前の状況をさりげなく、しかもきちんと受け入れる学生達の明朗さがあったのかもしれない。

## ②《似顔絵をプレゼント。》

企画を平成21年度に何回実施するかということは決まっておらず、第1回目の反応を見てから考えることにしていた。第1回企画が好評を得たこともあり、その後開かれた美大と病院の合同会議では、今度はクリスマスバージョンをとの提案もあったが、学生スタッフの意向も確認してからということにした。

学生は冬休み前までは進級制作等で忙しく、年末になると帰省するなどの理由で、前回並みの企画は、関わる人数と作業面からいって難しいということになった。また、セロファンの装飾が恒例化するような印象を与えるのも、変化を望む学生の思いからすると若干抵抗があるようだったので、ガラス窓の保護用シートはそのままにしておき、「セロファン」はまたの機会に構想を練って行うことにした。

今回は出来る範囲で内容のあるものをという意見でまとめ、入院患者に似顔絵を描いて進呈するという案が学生から提案された。「ロビー」の全体感のあるワークショップに対して、似顔絵を描くという対個人とのコミュニケーションの形は企画としてもメリハリがあって良い企画だと判断した。

企画第2回目は「似顔絵をプレゼント。」と銘打って12月24日(木)から26日(土)の3日間(27日は予備日)にかけて行われることになった。

しかし実際に参加できる学生スタッフは前回参加の中からは1名のみであったので、新規のスタッフを募る必要があった。その結果、新たに学部1年生、2年生から5名が加わることになり、スタッフ全員が女子学生による6名で3日間のシフトを組み、病院に出向くことになった。

今回の企画にあたり配慮したことは、患者と学生が似顔絵を制作する環境をどのように整えるかであった。学生が院内に持ちこむ可能性があるインフルエンザの予防、モデルになる患者の選定、何処で描くのかなど。入院患者と学生が対面して一定時間の姿勢を保つ作業であることから、モデルになる患者の体調については特に配慮が必要であった。

この点の調整については主に中町麻紀子看護師長のお世話になった。患者への呼びかけから3日間の時間配分と実施場所まで決めてくれたので、こちらは色紙と水彩用具一式を携えて指定された病室やロビーに向かうだけだった。

実施初日がクリスマスイヴということもあり、自分としては少しばかりサンタさん気分のところがあつたと思う。しかしそんな気分は病室に入ると消えた。学生と共に向かった病室には、自らの病状や老いと向き合う患者、せわしなく動く看護師の、いつもと変わらない日常と現実があつた。

賑わいを見せたステンドグラスの時とは様相が変わり、静かな緊張感が漂う病室では、学生との会話を楽しむ人、途中で辛くなって困惑の表情を浮かべる人、それぞれの光景が見られた。ベッドに横たわる患者を前にして、学生は何を感じながら筆をとっていたのだろうか。

学生達は患者とのやりとりに気を配りながらもモデルの顔を凝視し、注意深く鉛筆を走らせていく。似顔絵制作を通して、「学校から一歩外に踏み出すと、本当に色々な人がいる」ことを目の当たりし、「授業や自宅で絵に取り組むことがほとんどだった」自分の制作が「自分の感覚や世界観にのみこだわってしまっていた」ことに気付く。

描かれる側の患者に目を移すと、90歳になる老婦人が学生を相手にとりとめのない世間話に興じ、この日のためにパジャマを新調したという婦人の表情からは、いつもとは違うささやかなおしゃれを楽しんでいる様子がうかがえた。しかし実は患者も、目の前で自分を描いている初対面の、屈託のない笑顔を見せる画学生を観察している。束の間の会話を



楽しみながらも、社会と距離を置いている我が身から失われつつある何かを思い起こそうとしているようであった。(図5)(図6)(図7)



図5



図6



図7

今回の似顔絵というツールを介して絵を描く学生と描かれる患者の間に成立している時間と空間の在り様は、横川教授の示唆する、医療環境におけるホスピタリティ(もてなし)の姿の一側面としての「ヒューマン・ドローイング」とも呼べるコミュニケーションの形といえる。似顔絵を一枚描き終え

る度に道具を抱え、次の部屋に向かう学生達の姿には、普段の学生生活で見せる表情とは異質の疲労感が漂っていたが、その横顔には最後のひとりまで気を抜かずに描き通す意志が感じられた。

3日間で計21点の似顔絵が完成し、その内18点を年明けの1月14日(木)～20日(水)の期間、1階待合いホールで展示した。そこにはやわらかな色彩で彩色されたモデルの、入院中のイメージとは離れた健康的な表情が並んでいた。これは学生の若い感性が眼に映る情報を咀嚼し、表現までに昇華する筆力のなせる技であろう。描かれた似顔絵は病院ロビーで一定期間展示することになっていたが、展示を望



図8

まない人が2名いるという話を伝え聞き、患者の心情の一端を察することになった。(図8)

似顔絵企画の準備段階で、モデルになってくれる患者の手配のことで電話した際の、看護師長との会話。打合せ中、こちらが不用意に「年内に都合がつかない患者さんは年明けにまた時間を作ってもらって…」と言いかけると、「私たちは患者さんに早くよくなって退院してほしいし、一期一会の気持ちで接しています。〈また〉という台詞は言えません。」と諭された。電話越しではあるが毅然としてそれを言われたとき、日常的に医療の現実と向きあっている覚悟のようなものを示され不意に感動してしまった。プロジェクトを進めていく上で、また企画を行う際の患者の心情について認識を新たにする貴重な言葉であった。

展示期間終了後、似顔絵は病院の方から患者本人に渡された。

「今年度中にもう1回やろう。」と学生スタッフに声をかけ、第3回企画は後期授業がひと区切りついてから行うことになった。企画のイメージは「今度は窓にカラーセロファン」という暗黙の了解があったが、日程調整をしていく中で担当である自分と学生の都合がつかず、さらには参加できる人数が少ないことがわかった。結果として窓のワークショップは今回も見送ることになった。

「ロビーを彩る光のアート」は、ワークショップ形式で患者が参加することと、コンセプトを公にアピールする上で見栄えもよく分かりやすいという点で、外に開かれた華やかな企画であった。一転して「似顔絵」では、患者と学生との、穏やかではあるが緊張感のある交感がみられ、自分としてはこの2回目のほうに静かな手応えを感じていた。

そうした思いもあり、第3回企画はこれまでよりも患者と学生との、個々のコミュニケーションを強めたものにしたいと考えていたが、企画会議ではまたしても学生の的を射た発想に驚かされることになる。待合いホールの会場でオリジナルの万華鏡を作り、その光と彩りを持ち帰ってもらうのだと言う。

患者が学生スタッフの手を借りて万華鏡制作を楽しみ、病室に持ち帰った後も時折窓にかざしたり、面会にきた家族にも見せることだろう。それはワークショップが病院の枠を超えた広がりを持つことを意味する。コンセプト、予算、労力いずれの面に於いても実施の条件を満たしている。その案が出たとき、今回もうまくいくと思った。企画の呼称を「カレイドスコープ・ワークショップ」とも考えたが、一般的に通りの良い日本語で「万華鏡ワークショップ」とした。

### ③《万華鏡ワークショップ》

第3回企画「万華鏡ワークショップ」は2月18日(木)、19日(金)の2日間、1階待合いホール大窓前に会場を設置して行われた。3カ所のテーブルで6名の学生スタッフが制作の補助をした。今回は日本画専攻からも学生1名がスタッフとして加わった。

制作の手順はシンプルである。市販の万華鏡キッ

トの円筒に、ビーズや透明感のある小石、意外なものでは毛糸、米、膠粒など、好みの素材を投入し、蓋をしたあとは、色紙や布などで装飾をして完成。ある程度手先を動かす残存能力があれば容易な作業であることと、なによりも万華鏡を覗いた時の意外性のある美しさが喜ばれ、2日間分として100個用意した万華鏡キットが2日目の終了予定時刻1時間前には全て無くなるほどの盛況であった。

(図9)(図10)



図9



図10

今回は「窓」の時には少なかった男性患者の姿もよく見られた。女性参加者にみられるような、互いの万華鏡を覗き合って賑わうといった風ではないが、わが子ほどの年の学生から神妙に説明を受けながら口をとがらせ作業に没頭し、時折表情を緩める様子は、微笑ましく感じられた。

なかには、2日間にかけて何度も会場に現れ、その都度に万華鏡を作っていく女性の入院患者がいた。最初のうちはスタッフも気前よく振る舞っていたが、キットの数が不足することがわかり、4度目



か5度目の時には丁重にお断りせざるを得なかった。ひとり病室に戻っていく姿から、万華鏡が欲しかったのではなく、ワークショップの雰囲気や学生との会話が楽しかったのかもしれない、などと想像した。



図11

万華鏡キットが残り僅かになった頃、老齢の女性が看護師に車椅子を押されて連れられてきた。表情に乏しく、ワークショップの様子にもさほど興味を示さないようであったが、やはり車椅子で来ていたとなりの男性の作った万華鏡を見せられると、「きれいだあ、あー、きれいだあ」と、童心に返ったように声をあげ涙を流さんばかりに感動していた。様子を察した男性は、自分のために作った万華鏡をその女性にプレゼントし、満足げな表情で自身の手には何も持たず車椅子で病室に戻られた。

そのコミュニケーションが凝縮された空間に立ち会った学生スタッフと筆者は、説明のつかない、何か熱くこみ上がる感情を共有していた。

## 6.「アートによる癒し」

「アートによる癒し」とは何なのか。医療機関における芸術活動の目的を説明するときに使われる標語のようなものであるが、制作者の立場にある場合の筆者にとってはその言葉のままに提示されると正直言って違和感がある。アートは「癒し」もするけども、時に「問題提起」もする。作り手やそれを受けとる側の存在理由を揺さぶり、困惑させる。

プロジェクト担当当初は企画を立ち上げる際の明確なイメージが湧かず、単に教員としての一業務と

しては済まされないような、重いテーマを課せられた気分になった。メディアで見聞きするホスピスのような医療現場にも立ち入ったことがなく、実感がない状況でどのように企画を立ち上げ、進めていけばよいのか。

一般認識として「美しいもので心地よく、人々の感性に新鮮な驚きと感動を与える」アートの存在を認める一方で、アートは人のためのみならず、凡そ健康的とは言えないある種の毒や不快、美しいとされない事象の中にも美を見出し、闇の淵に立ち心の深奥を覗くような、言わば自らの欠落した部分を埋める行為として存在することは周知の通りである。

仮にその観点もよしとしてこのプロジェクトの立ち上げをイメージしても「癒し」にはつながらないし説明も難しい。

医療分野における「アートセラピー〈芸術療法〉」の一環として括ることも考えたが、プロジェクトのもう一つの側面である芸術・美術の研究機関における教育的効果を考えた時、適当な解釈ではないと感じた。とりあえずきれいで楽しいという方向で進めていけばプロジェクトは無難に進行できるかもしれない、と割り切ろうとしたが、葛藤を自覚しながら、アートの一側面としての都合の良い部分に焦点をあてプロジェクトを進行しようとしていることに、後ろめたさがあった。

しかし、もとよりアートは多面的で全人格的な所業であるし、手段であり、プロセスであり、現象でもある、という前提に立てば、現段階においてホスピタリティアート・プロジェクトの在り方を限定する必要はなく、プロジェクトの実践から医療環境に適したアートの側面を切り取り提示し、プロジェクトとしての体を成していく中で、次第にしかるべき結論へと導かれていくのではないかという考えに至った。それは妥協した思索によるものではなく、3度の企画を通して行った学生との議論や、ワークショップに立ち会った経験から得た実感である。

## 7.ケアの現場におけるアート 患者と学生と

プロジェクトの始まりの頃、学生との話し合いで、何をどのように提示したら患者に喜ばれ元気づけることができるかを話し合った。発想において「癒しを与える」ことを前提に進めようとする、それは「卑しい行為」につながることを学生たちは直感的に知っている。患者の立場に立って考えることは、実際にその身にはない学生スタッフと筆者自身にとって易しいことではなかった。

市立病院に出向いた際に制作場所の候補を見学し、病院長の説明を聞いていく中で、医療環境に適する企画を考えていくことになった。最初の企画「ロビーを彩る光のアート」の意見を出し合う様子を思い起こすと、最初は「ケア」という、美大学生の日常において関わる機会の少ないテーマの前に学生たちの口も重かったが、発想のもとになっていた要素として「自分達もやっていて共感できること」があった。それは後の結果として、プロジェクトのコンセプトである「患者、医療者そして美大スタッフが対等の立場で参加し、それぞれがアートの持つ潜在力を見出し、活用する」ことにつながっていた。

人は誰でも病気になり、老いを迎え、死ぬことを若い学生達も知っているが、明日そうなるという切迫感はない。彼らの多くは普段の大学生活において、それを意識するあまりに自らが厭世的になる危険性を警戒しつつ、「今日こなしている仕事は明日もまた出来る」ことを前提に、自らの五感を（時には第六感という思い込みも）、肉体を駆使して自由に制作を行い、自身の裁量で時間を費やす権利が保障されている。一方、「身体的制限」や「限られた時間」と向きあう状況にある人々にとって、何かをつくり表現することは、「生きる」と同義のように映る。学生スタッフはワークショップの経験によって、自己実現や業績志向というような制作動機とは異質の、無垢で澄んだ表現行為に直面した。

患者は初めて手に取る材料と用具で作ったかたちと色彩に驚き、感動する。万華鏡作りに没頭し、初対面の学生たちと新鮮な面持ちで会話を楽しむ。ワークショップによる患者との「協働」を通して、学生の患者への眼差しが「同情」から「共感」へと

変化し、患者と自分が「対等」の立場になっていく。その過程は、人の「限られている」持ち時間を、凝縮したかたちで学生達に認識させる機会になったと考えられる。

## 8. ワークショップ・展示 平成22年度

### ①光の回廊シリーズ（その2）

#### 《夢の水族館》

ホスピタリティアート・プロジェクト第6回として、昨年秋に続いて2度目のカラーセロファンを用いたワークショップ・展示を行った。プロジェクト参加学生の顔ぶれも若干入れ替わり、昨年からの学生に新たに学部1、2年生が加わった。

平成22年7月23日に美大内で第1回会議を行い、今年のワークショップと展示の内容を話し合った。昨年のテーマ「秋の実り／生命の樹」に続く病院待ち合いホール大窓の装飾をどのようにするか意見を出し合った結果、「海」をテーマにすることになったが、日程調整をした結果、ワークショップの実施と展示作業が8月下旬になったことで「海」そのものをテーマにすることは季節感の点から無理があるということになった。「昨年は秋の風景だったので、今回は海の生き物。」とスタッフの頭の中で装飾のイメージが固まっていたこともあり思案していたところ、一年を通してさかなが見られる水族館なら良いのではないかという意見が出た。

テーマタイトルは《夢の水族館》。水族館のイメージから、様々な海の生き物が自由に悠々と泳ぐ姿に夢を抱くかもしれない入院患者の思いを想定した。

数日後、学生スタッフが持ち寄ったイメージデッサンの中から、弧を描く光る水面の下にイルカやサメ、マンボウなどが回遊しているものに決まった。前年のものと比べて構図と色彩が工夫され、テーマの全体感が遠目にも明快でよく表現されることがイメージできた。その後美大での下準備を経て病院でのワークショップに向かった。昨年の経験を踏まえて4年生が中心となった準備は計画的に手際よく進められた。新しくメンバーに加わった学生も最初のう

ちは遠慮気味に先輩の作業を観察していたが、程なく順応し積極的に作業に取り組んでいた。(図12)



図12

8月24日(火)、25日(水)に美大集会ホールでワークショップに使用するセロファンや型紙の下準備が行われ、8月26日(木)、27日の市立病院一階待合いホールでのワークショップ・展示作業の日をむかえた。作業の段取りも組織的によく計画されていて、今回は1日目から2日目の午前までを窓の制作に専念することにあて、ワークショップは2日目の午後から行った。

昨年の反省点として、窓の制作に向かう者とワークショップを担当する者とは分かれ過ぎてしまい、制作空間全体の姿に統一感がないというものがあった。また、ワークショップに参加している患者の横で大きな脚立に乗って作業しているスタッフがいると危険であるという意見もあった。

これらの指摘は学生達の中から出てきたもので、昨年はそういった問題の対応を巡り、作業の途中に学生間の意見の相違が見られる場面があったが、それらの経験を今回に生かして改善されていることに感心した。

また今回は、前回の「患者さんから見て誰がスタッフなのか分かりにくいので工夫してほしい」との声を受けてスタッフT-シャツを作ってワークショップに臨んだ。学生がデザインした若草色のT-シャツは健康的なイメージで印象がよく、ワークショップの一体感が増した。そして今回は4年生の勧めで2年生、1年生のスタッフが患者への対応にあたっている姿が印象的に映った。(図13)



図13

夏の終わりとはいえ窓越しの日差しは強く、スタッフも患者も汗ばむ陽気の中作業は続けられ、夕方にはほぼ全体が完成した。窓からこぼれる色彩が行き交う人を照らし、床面は色とりどりの海の生き物たちで鮮やかに彩られた。待合いホールは3週間限定の「光の回廊」となった。(図14)



図14 撮影 品野與四寛

伝え聞いた話によれば、その場を訪れていた市の教育関係者からは、学生達の患者への接し方に好感を持って視察されていたとのことである。自分の目には学生は患者に対し自然に振る舞っており、そのような指摘を受けると少々意外な感があるが、美大の一員としては周囲のそのような評価をありがたく受けとめたいと思う。

学生の中には介護等体験の経験者もいたと思うが、改めて考えてみると、基本的な「誠実さ」を備えていることは、作品制作の際にも、患者への対応においても、必要な要素なのかもしれない。

今回の問題点としては、残暑厳しい折、日差しによってガラスの温度が上がり、完成後2日目には早



くもセロファンが剥がれ始め、毎日のように修復が必要となったことがあげられる。

耐久性の問題はセロファンの性質上避けられないことではある。店舗ディスプレイ用のカットティングシートを使えば耐久性が増すことは明らかであるが、しかし患者が長期入院しないことをよしとするように、剥がれゆくセロファンもまた、そこに留まらずに、一定期間の彩りをもたらした後は、その役目を終えるものとして捉えるのも良いのではないかと思う。

新たな試みとして、1階待合いホールの他に、各階休憩所の窓ガラスにも海の生き物を象ったセロファンで飾り、入院中の患者さんの眼を楽しませることができないだろうかという提案が学生スタッフから出た。

発想のもとはおそらく昨年の展示の際に患者の要望で病室に出張してセロファンを設置したことからきたものだと思う。考えてみると、ベッドから出られない、または体調面や気持ちの部分で階下に降りられないという患者の方が、1階のワークショップ会場まで出て来られる患者より不自由で孤独なのであった。

窓ガラスにセロファンを貼り終えた休憩所を観察していると、そこを訪れる患者はテレビを眺めたり新聞を読んだり携帯電話をかけたりと、少なからずそこで時間を過ごしている様子がうかがえた。

設置してみると大ガラス展示のミニ版のようではあったが、窓に貼られたさかなたちが背景の建物の中を泳いでいるように見え、休憩空間の中でユーモ

アを感じさせるアクセントになっていて効果的だった。患者の要望があれば病室の窓にも設置することを検討してもよいかと思う。(図15)

## ②プロジェクト記録病院内展示

金沢市立病院からの依頼で、昨年度から計6回にわたるホスピタリティアート・プロジェクト記録展示を病院内で行うことになった。近年、病院には患者に安らぎを与える院内環境の整備やその取り組みを周辺の住民や地域社会に向けて発信、案内する姿勢が求められているという。そのような「病院の機能評価」にむけた取り組みの一環として、これまでのプロジェクトを紹介する展示スペースを設けることになった。

設置場所は来院者や病院関係者が携帯電話を使える休憩場として利用されていた、一階待合いホールに面した階段下スペースを利用することになった。この場所は誰でも気軽に立ち寄ることが出来るし、外からもガラス越しに展示の様子が見える。階段下という特殊な空間ではあるが、ある程度の壁面もあるので小規模な展示に適していた。

過去6回の、筆者が担当した以外の企画も含めた写真の中からそれぞれの一場面を選んで額装し、横に活動内容の概要文を添えて展示した。作業は下準備と設置を10月29日～11月2日にかけて行い、翌3日の朝から夕方にかけて、外に面した壁面にも写真パネルを大小織り交ぜて展示した。

照明設備がない中、日が落ちるまでに終える必要があり、学生の手を借りずに行った作業は時間との



図15



図16

闘いであったが、後に行われた美大と市立病院の合同ミーティングでは、展示を見た人の反応は概ね好評との言葉を頂いた。(図16)

後日、病院側の提案で照明設備が付きライトアップされると、簡易的なディスプレイの割には見栄えがして、外からもよく見えていた。

## 9. 大学と病院と

平成21年度～22年度にわたる成果の背景には、美大と病院との新しい出会いがあった。事務レベルのスムーズな連携のもと、大学からは制作にかかる備品の提供、制作費、報道メディアへの周知などの協力があった。また22年度からはワークショップや展示に使う資材や用具、材料の搬入・搬出と、学生スタッフの移動に公用車とマイクロバスを利用させて頂いた。また脚立運搬の際には金沢市の資材運搬車両の提供があり、担当職員の方には通常業務以外の作業にも関わらず快く協力を頂いて大変ありがたく感じた。事務局長からは陣中見舞いとばかりに、学生達に差し入れが届けられた。横川プロジェクト座長を始め教員スタッフは、企画の発想段階から実施に至るプロセスにおいて学生スタッフに随時助言を与え、直接作業にも加わった。

病院からは院内周知と施設の提供、第2回企画以降の制作費、そして高田院長を始めとするプロジェクトに関った医師、看護師、事務局の全面的な協力があった。企画の度に何を言い出すか知れない美大側の提案に理解を示し、実施するための環境を整えてくれた。会場設置や撤去の際の迅速な対応は企画を円滑に進める上で心強く、剥離したセロファンの修復の際にも尽力頂いた。学生スタッフへの心遣いも有難く、また看護師の患者への気配りの程は想像に難くなかった。そして、献身的に作業に従事した学生スタッフと、ワークショップに参加してくれた患者の方々は、プロジェクトの中心を成していた。

心残りな点としては、22年度のワークショップが、1回の実施に終わったことである。昨年度のような、似顔絵や万華鏡作りも予定していたが、自分と学生

の日程調整等の事情で叶わなかった。

## 10. おわりに

プロジェクトを進めていく中で、病院、患者を対象としたこのような活動について、一部見方によっては弱者を利用しているとか、偽善的では？と捉える向きもあることを知った。

そのような問いかけに対抗し得る知識も経験も十分ではないが、私見として述べるとすれば、否定的な見方を軽減するために、プロジェクト全体の運営を注意深く見つめ、結果を検証し、地域社会とのつながりを広める努力を続けることが必要であろう。

そしてプロジェクトの目的とそれによってもたらされることのメリットを明示し、目指すべき方向性を整えていくことは、活動上起こるかもしれない不測の事態を未然に防ぐことを可能にし、プロジェクトの進展と肯定につながると考えられる。

プロジェクトに携わった身とすれば、今現在の実感を今後の活動を進めていく上での支柱にしたいと思う。

自分が見た光景も、記録写真も、映像も、そこに映る人たちは、だれもが皆笑みを浮かべその時間を生きている。だからこれはよいことなのだと思う。



※本稿は平成21年度～22年度までの記録をもとに構成、記述した。

(みうら・けんじ 油画)

(2011年10月31日 受理)